

どれくらい歩いていただろうか。

だれかと話していた気がする。かれは突然、鋭い鳴声に打たれ我に帰った。立ち止り声のした方へ目をこらす。廃屋の農家も林もかぶさるように迫る山肌の深い沈黙に呑みこまれ、やたらに懐かしさを誘う情景が広がるばかりである。

あれは、鳥の声だったのか。

疲れを感じ、休めるところを探してぬれ縁に腰をおろした。眼下の車庫の檜の梢がちょうど目の高さになった。

ふもとの方から吹き上がってくる風に梢の葉がひらひらゆれていた。秀次郎の中に遠い記憶がよみがえってきた。

あの日このぬれ縁で、元戦犯のかれは政江と同じ気持ちでいたのだ。

谷からの風が^{たなだ}棚田に青々と茂る稲をなびかせながら吹き上がっていた。政江は稲が描く風の通り道をいつまでも眺めている。風は政江の男のように刈り上げた頭髪をかすかにゆらして通り過ぎていく。



挿絵 (M. Yamada)

彼女は三十もまだ半ばだった。

秀次郎はふとそのことの残酷さに胸をつかれ、何かいおうとしたがどんな言葉もかけられずにいたのだ。

かれは思い切って、政江から読ませてもらった夫の獄中日記のことを話そうとした。しかし、いまこそ^{いた}労わりいうときだと感じながらかれはなおためらっていたのだ。

政江が獄中日記を持ってきたのは、佐礼山へ出かける数日前のことだ。巢鴨で使用されていたそのノートは芳野の豆粒ほどの字でびっしり埋まっていた。

一般に死刑囚が獄中で綴ったものは米軍の手で処理され、遺族の元へ返されることはなかったのだが、花山信勝師のはからいで芳野の日記は政江の元へ戻ることになったのだ。政江はだれにも見せなかった日記を元大隊長に読んで欲しいと持参したのである。

そこには驚くべき事実が綴られていた。

横浜軍事法廷に臨むにあたって、十五名の捕虜を殺害したとして起訴された被告九名の言い分が、命令を下す立場にあった芳野大尉と重要なところでまったく食い違い、被告同士の激しい対立があったのである。

お互いの顔がやっと見分けられるほどの暗やみの墓場で、捕虜収容所本所長

の伝達命令が実行されたのだが、実際に捕虜を斬首した部下たちは現場で芳野大尉が指揮をしたと主張した。ところが芳野は日記の中で、自分は殺害の現場には行かず、直接指揮もしていないと書いていた。その上で、証言がまちまちなまま法廷に臨めば全員が極刑になるおそれがあるというアメリカ人弁護士の説得を受け入れ、将校としての責任を取り自らが現場で指揮をしたと証言することになったと書き残していたのである。日記にはこんな歌がそえられていた。

「己が身のおぼえなきこと聞かるれどいかに答えん言の葉もなし」

軍人として、秀次郎は芳野の日記が真実であることを直感した。だからといっていまさらどうなるというのか。死んだ者は生き返ってこない。結局かれは沈黙を守った。そうすることで、真実の持つ重みを政江とわかちあうことになった。

秀次郎はそれでよかったとふりかえるのだった。その後鴨緑丸事件のことは、ノンフィクション作家の上坂冬子はその著『巣鴨プリズン 13号鉄扉』の中で取り上げることとなった。政江は作家の取材を受け入れ、夫の日記を見せた。それで、芳野の苦悩と生死をわけた潔い決断が全国の読者に知られることになった。だが、このときも政江は格別なことを秀次郎に洩らすことはなかった。それは、かれがほこらへ参拝し続けていることをだれにも話したがらないのと同じ気持ちにちがいがなかった。

足音がして、秀次郎は我に帰った。

「志村さん」

と呼んだのは高市であった。

「ついこの下まで用があったから、ついでに寄ってみました」

右手に車のキーをぶらぶらさせながら部長が近づいてきた。

下りのバスが出るにはまだ間があるから、よかったら役場まで送るという。

秀次郎は好意に甘えることにした。

石段の上に並んで立った。

「墜落したのはどのあたりですか」

目の高さよりやや上方へ遠く山が連なっている。

「確かあのあたりでした。地由権現じよしのすぐ下あたりでしたから」

高市は日が傾きはじめた峰の一角を指差した。春分の日にはその峰へ夕日が落ちるのだという。

「墜落現場はどうなりました」

「はあ？」

「つまり、何か保存してあるとか……」

高市はにやりとした。

「もう五十年も昔のことですけ。なんせアメリカと戦争したことすら知らん若者がおるちゅう時代ですから。行っても何の跡もないでしょうな」

高市の言葉はそっけなかったが、二人はしばらく立ち止まり、山をながめていた。